

星

伊藤痴遊全集



伊藤忠遜全集

第九卷

昭和四年十二月十五日印刷  
昭和四年十二月二十日發行

伊藤痴遊全集 第九卷

著者 伊藤 仁太郎

發行者 下中 彌三郎

東京市麹町區下六番町一〇

印刷者 濤川 薫

東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇  
振替東京二九六三九番 株式會社

平 凡 社

電話九段 三三一六  
三四六  
四七四  
七五七番

# 第九卷 星 亨 目次

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 卷頭の詞(一一二).....     | 三   |
| 彼の生立と其父母(一一四)..... | 九   |
| 陸奥と彼(一一五).....     | 三三  |
| 税關長時代(一一〇).....    | 四九  |
| 代言人としての彼(一一三)..... | 六六  |
| 國會運動の大要(一一二).....  | 六七  |
| 東洋自由新聞(一一二).....   | 四   |
| 政黨の勃興(一一三).....    | 一〇三 |
| 板垣總理の洋行(一一〇).....  | 一一  |
| 新聞經營(一一五).....     | 一三六 |
| 偽黨撲滅(一一六).....     | 一四九 |

|                      |     |
|----------------------|-----|
| 新潟入獄事件(一—一三).....    | 一六五 |
| 福島事件と高田事件(一—四).....  | 一六六 |
| 浦和事件(一—一〇).....      | 二〇六 |
| 秩父暴動(一—三).....       | 二三二 |
| 加波山の狂嵐(一—四).....     | 二六四 |
| 飯田事件と平田橋事件(一—五)..... | 二七六 |
| 静岡岡事件(一—三).....      | 二九〇 |
| 自由黨の解散(一—二).....     | 二九九 |
| 大阪事件(一—五).....       | 三〇六 |
| 明治二十年政變の起因(一—八)..... | 三三二 |
| 板垣の辭爵事件(一—四).....    | 三四二 |
| 條約改正反對運動(一—六).....   | 三五三 |
| 井上外相の辭職(一—四).....    | 三七三 |

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 懇親會の衝突(一一五).....    | 三六  |
| 尾崎行雄の意氣(一一五).....   | 四〇〇 |
| 祕密出版事件(一一七).....    | 四二五 |
| 保安條例の實施(一一〇).....   | 四三四 |
| 再度の入獄(一一五).....     | 四六三 |
| 初期の帝國議會(一一三).....   | 四七七 |
| 議長除名と彼(一一六).....    | 四八九 |
| 憲政黨と彼(一一九).....     | 五一一 |
| 市會の疑獄と彼(一二一).....   | 五四二 |
| 非難の高潮と其遭難(一一六)..... | 五八〇 |
| 餘錄.....             | 六二六 |

人 巨

星

亨



## 卷頭の詞

## 一

大正二年の春、星亨の傳記を出した時、尾崎聖堂は、左の如き序文を寄せてくれた。

蓋棺後、既二十年ヲ經過スト雖モ、其毀譽褒貶、未ダ定ラザルモノハ、星亨氏ニ非ズヤ。世人ヲシテ、事アル毎ニ、其人ヲ思ヒ起サシムルモノハ、亦星亨氏ニ非ズヤ。其性行ノ是非善惡ハ、暫ク措テ問ハズ、其當世無双ノ活動家タルノ一事ニ至テハ、世間復タ之ヲ否定スルモノナカルベシ。余ハ二十年ノ久シキ、政敵トシテ常ニ氏ト對戰シ、晩年春畝公政友會ヲ起スニ及ンデ、始テ氏ト黨派ヲ同ウセリト雖モ、未ダ深く相ヒ交ハルニ至ラズシテ、幽明忽チ境ヲ異ニシタリ。余ハ敵トシテ久シク氏ヲ知り、亦味方トシテ聊カ氏ヲ知レリ。故ニ此卷ニ對シテ、興趣特ニ深長ナルヲ覺ユ。氏ハ素ト無双ノ鬪將ニシテ敵ヲ討ツニ手段ヲ選マザルノ人ナリ。而シテ其終生ノ政敵トシテ、日夜懷ニ忘ル、能ハザリシモノハ、大隈伯沼間氏等ヲ戴ケル改進黨ナルガ如シ。氏ノ改進黨ヲ惡ムコト、遠ク薩長兩藩閥ニ過ギ、自由改進黨ノ接近提携ハ、氏常ニ之ヲ破壊シタリ。氏ガ

憲政ニ及ボセル效果ニ至テハ、興味アル疑問ニ屬ス。他日閑ヲ得バ、著者ト一夕相ヒ會シテ之ヲ  
細論スベシ。

曙 堂 居 士

尾崎は、帝國議會の演壇に、幾たびか、星に對する、彈劾演説を、試みた人であるが、星は、左様した事情のあつたにも拘らず、立憲政友會の創立に際しては、尾崎を、總務の一人に推舉した。

兩者の性格と思想には、可成りの隔りがあつたから、星が、猶ほ生きて居ても、その接近は、餘り期待されなかつたらうが、それにしても、星の壽命を、一二年引延し得たならば、相當に面白い事になつたであらう、と思はれる。

星の最期は、明治三十四年六月二十一日であつた。

この日は、薄曇りの天氣で、非常に蒸暑かつた。著者は、彼を、東京市參事會の別室へ送つて、下谷の寓居へ歸り一と息吐いた所へ、その凶變を知らせて來たので、頗る疑惑を抱いて、容易に信じ得なかつた。

そのうちに、再度の凶報があつた。著者は、恰も夢路を辿る心地して、東京市役所へ駆け付けたら、今別れたばかりの參事會の一室に、血塗れの姿で、彼は、倒れて居た。

それから數へて、既に二十九年になるが、政界に、事の起る毎に、必ず彼を想ひ出す。若し彼が居たならば、といふ感じが、すぐ起つて來る。苟も、彼を知るほどのものは、すべて同じであらうが、それだけに、政黨政治家として彼の偉大さが、思はれるのである。

乍併、彼の如く、毀譽褒貶の紛々として、死後三十年の今日に到るも、猶且つ、その批判の定まらざるは、果して如何なる次第か。或は巨人であるとか、人傑である、とかいふて、口を極めて賞讃するものが在るかと思へば、他

の一方には、公盜の巨魁であるとか、悪人の親玉である、とかいふて、聞くに堪へぬ罵詈の言を放つて、之を攻撃するものがある。

彼の反對黨は、故らに敵意を挟んで、只だ傷けんがための妄評を、巧みに宣傳するのであつたが、之に據つて、政界の事情に通ぜざる、多くの人々は、直に量の價を、定めてしまふ傾きがあつた。

然れども、彼の眞價は、此事のあるが爲めに、更に一段の大を加へるのみであつて、更にその人格の上には、何の障りもないのである。之が爲には、二三の書物も出て居るが、何れを見ても、眞に星を究めて、書いて居るものはない、徒に道聽塗説を信じ、新聞の切抜に依つて、それに評論を加へたに過ぎぬ、杜撰極つたものばかりであつた。

著者は幸にして、彼の知遇を得、殆ど二十年間、其の左右に居つたのであるから、能く彼が公私の上に於ける、總べてを知つて居る。時に議論の合はぬ爲に、其傍を離れたこともあるが、兎に角彼を、能く知つて居る者の一人であるから、彼の生涯を見て、彼を論ずるには、最も適當の者であると、自ら信じて疑はぬのである。故に著者は、星の長所を擧げる、と同時に、その短所も忌憚なく言ふ積りである。非常に優れた所もあるが、缺點も、亦頗る多かつた人であるから、其總てを盡したい、と思ふのである。

先づ彼は、善惡何れであるか、と言へば、著者は善と答へる。公盜の巨魁であるかと訊かれたら、著者は然らずと斷言するのみならず、絶大の巨人である、と、言ひ度いのである。

反對黨の讒誣を、一身に受けて、尙且つ其所信を遂行し、而も、遂に蠻人の毒手に倒れたのは、惜む可きの至りであつた。彼の生涯ほど、波瀾の多くして、興味に富んだものは、稀有であらう。

## 二

彼は、平和の時代に生れたので、周より兵力を以てするの戦ひはしなかつたが、その政敵に對しては、常に攻勢を

取つて、必ず勝たねば已まぬ、といふ意氣を以て、勇往邁進した事は、實に目覺しいものであつた。身は、微賤から起つて、一國の大臣にもなつたのみならず、政界を三分して、少くも其一をもち、活殺自在、如何なる大問題も、彼の手に觸るれば、利刀、朽索を斬るの機があり、事を裁して謬らず、飽迄も、自信を強くして、勝敗の打算に巧みなることは、實に驚き入るの外はなかつた。而して、其の最期は、シーザーのそれに、似て居る。

シーザーと彼が、酷似して居たのは、其の兇刃に斃れた、といふ一點ばかりでなく、如何にも野心満々として、志望の半途にして、敵黨の手に、刺されたのも、酷く似て居る。シーザーは、敵と戦つた後に、必ず羅馬市民を、賑はすべき土産を、持つて來たが、彼もそれと同じで、事は、政黨の争なるに拘らず、争へば必ず、味方の爲に、何者かを提げて來たものだ。國家の問題は、すべて大局から打算して、その方針を誤らなかつたのである。斯様な點は、頗る似て居るが、只僅に違ふ所は、シーザーは、非常なハイカラで、お洒落であつたが、彼は、更に身の廻りを飾らなかつた。シーザーは、一個の好色漢で、敵の女將を、孕ませたこと杯もあつたが、彼は、更に色に溺れざる人であつた。實子の無きにも拘らず、當世流行の妾を蓄へず、紳士豪商が、唯一の樂みになつて居る、待合遊びもせず、又弄花もやらなかつた。品行の高潔なる點に於ては、確かに當代の第一流であつた。斯ういふ風に、シーザーとは、全く違つた所もあつたが、仕事のやり工合と、計畫の仕方とは、毫も違はなかつた。

而して、其の横死を遂げる前の事で、實に似通ふた所が、多く在つたのも、不思議である。古今、英雄の事蹟には、暗合する點の多くあるものだが、シーザーと彼ほどに、暗合した點の多いものは、甚だ少ない。シーザーの死ぬ前に其の妻が、惡夢を見たとか、易者が、その外出を止めたとか、學者が忠告をしたとか、種々の事もあつたが、シーザーは、一切構はずに、出掛けて行つて、遂にブルタスに、やられて仕舞つた。是と同様な事は、星の場合にも、澤山にあつた。

平生は、門下生に對して、さらに愛嬌を振撒くやうな事はなかつたが、死ぬ前年頃から、その調子が、違つて來て

門下生の中には、先生も、妙な事をする、と感じた者もあった。

親しい友人は、餘りに彼が、敵の反撃を受けるので、萬一の事を慮つて、護衛を附けろ、と言つて勧めた事もあったが、彼は、それ等の忠告を退けて、一切用ひなかつた。死ぬ四五日前に、一家團樂して、食事を爲て居た時に、『己が死んでも、財産は別にないが、書物は澤山あるから、遺族は、これを賣喰ひにして居ても、當分は困ることはあるまい』

と、語つたことがある。同じく十日許り前に、宇都宮へ、縣會議員選舉の應援に、行つた時、前代議士の中山丹次郎の墓參に行かう、と言出した。土地の有志者を連れて、其の墓前に、禮拜した後に、

『幾ら大事にされても、死んぢや詰らんア』

と、如何にも感慨に堪へないやうな、容子が見えたので、左右に従いて居た者が、

『先生も、大分歳を老つた』

と言つて、語り合つたことがある。元來、彼は、その平生に於て、死の事や、墓參なぞについては、一向に頓着しなかつたのであるから、斯うした事のあつたのも、後になつて思へば、兎變の前兆の如くにも思はれる。害に遭ふた當日、元氣の無かつたことは、殊に甚しかつた。著者は、現に一時間許り前迄、一緒に居つたのであるが、著者の眼には、彼の姿がぼんやりと映つた。

『あなたは病後だから、御注意なさらないと、又悪くなりますよ』

『なアに、大丈夫だ。既うすつかり、快いのぢや』

『併し、元氣がないやうで、顔色が善くないから……』

と押返したら、

『馬鹿を言へ、己れ位に、元氣の者が、日本人にあるか』

と、言つて笑つた。其の笑ひ方が、何となく沈痛で、而かも、著者にも、異様に感じた。果せる哉、此の一時間後は市參事會室の慘劇と、なつたのである。

著者の知人に、文學士で龍野元四といふ人があつた。今は神戸で、貿易商になつて居るが、本郷の或る學校で、彼の殺された日に、丁度、羅馬史の講義をして居て、恰もシーザーが、ブルタスに刺されやう、とする場合の講義を、仕て居た所へ、新聞號外が來て、星の刺された事を知つたので、辰野は、非常に感慨を深くして、其日の講義は、一段と振つたといふ事を聞いた。

平生は、夏多なしのフロツクコートで、押通した人が、其の日に限つて、薄鼠の背廣服を、着て行つた、といふことも、一奇ではあるが、玄關迄出掛けてから、態々、室内へ歸つて來て、時計を掛け替へて行つたり、黒の山高帽子の外に冠らなかつた人が、偶々出入りの商人から、暑中見舞に貰ふた、パナマの帽子を、冠つて行つた杯も、後から思ふと、何となく死裝束を、着て行つたやうな、感じも起る。それ等の事情は、兎變當日の實況を、述べる時に、話さうと思ふが、兎に角、斯うした事も、あつたのである。

## 彼の生立と其父母

## 一

彼は、果して何者の子であらうか。これが今尚ほ、世間の疑問になつて居るから、可笑なものだ。此位に、明確な事柄が、何ぞ疑問になつたのであらうか、實に不思議に堪へないのである。或人は、山賊の子である、と言ひ、或人は、穢多の子である、と言ひ、根も葉もない、出鱈目を言ふて、彼を憎む、と同時に、其の親に迄、恥辱を加へんとして居る、一派の人々があつた。尤も、彼自らは、それ等の讒誣に對して、更に辯解らしいことは、絶えて言はなかつた。元來、彼は、自らの事を、多く語らなかつた人であるから、自然、斯うした誤も傳へられたのであらう。彼は、議會から除名せられて、其の選舉區たる、宇都宮へ歸つて、更に補缺選舉を爭ふ時に、選舉區の有力者が、彼に對して、

『あなたの素性に付いて、世間では、色々に申しますが、今度の選舉に就ましても、反對派の人達は、あなたを以て穢多とか非人とか申して、實に聞き苦しいことを、觸れ廻つて居りますが、甚だ残念で堪りませんから、どうか、先生の素性を明して戴きたいものです』

と言つた時に、彼は、冷笑を漏して、

『イヤ、それは詰らぬ心配だ。敵は何と言つても宜しい。敵の悪く言ふ程、己れが詰らぬ者の子なら、これ程になつ

たのは、猶ほ豪いことになる譯だから、決して心配はない。穢多や非人の子が、これ位になれば、實に豪いものだ。代議士の候補者は、つまりが、人物を擧げるのが、目的だから素性や出身の穿索は、全く別問題だ。生れは卑しくても、手腕があれば宜いではないか。彼等の悪く言ふのは、決して恐るゝに及ばぬ」と答へたので、其人も『大きにさうです』と言つて、星の言ふた通りを、それ〴〵説いて歩いた。此の競争も、大勝利を得て、彼は湧くが如き凱歌に送られて、東京に歸つた。

彼の一言は、實に然りである。人間といふものは、生れや素性抔は、構ふものではない。働きのある、手腕の確かな者ならば、何でも構はぬ。ヂスレーリは、ジエウの一族であつたが、遂に英國の大宰相に、なつたではないか。日蓮は、旃陀羅の子であつたが、一宗の開祖になつたではないか。天下の人物に對して、家柄や素性を、彼は言ふやうでは、駄目だ。日本人には、まだ此の弊があつて、大人物を押上げる場合に、何となく妨げになつていかぬ。家柄や素性なんぞを争つても、仕様がないてはないか。然れども、既に故人となつた、彼に向つては、其の素性を洗ひ、其の生涯を叙する必要があらう。著者は、忌憚なく、其點についても、言ふて見たいと思ふ。

然らば、彼は、果して何者の子であるか。父は、築地小田原町の左官の親方、佃屋徳兵衛と、いふ者であつて、母は、相州浦賀の漁夫の娘で、松といふのであつた。彼には、二人の姉がある。一人は、既に亡き人となつて、一人は今も尙ほ甲府に居る、といふことである。

時しも、嘉永二年、幕府は、外交内亂の挟み撃に苦しみ、三百年つゞいた泰平の夢は、黒船の渡來に打破られた。勤王攘夷の議論は、漸く盛になつて來たが、幕府の當局者に、其人を得ず、徳川の威信、漸く地に落ちて、心ある者は、遠からず世は亂れ立ち、六十餘州に、兵燹の起ること必然なりと、豫言者めいた事をいふて、すでに山國に隠れる者もあつたほどだ。此の天下多事の時に當つて、彼は、呱々の聲を、大江戸の一隅、而も四民の最下級たる、職人の家に揚げた。池上本門寺の墓畔を訪れると、一基の石碑に、大乗院殿法蓮日徳大居士と題し、側面に『孝子星亭建

之」と、刻んだものを見るであらう。それが當時の佃屋徳兵衛、即ち彼の父なる人の墓碑である。長いものを短くして着る、といふ職人の家から、彼の如き人傑を出したのは、實に異數ではないか。

戦國時代には、士百姓の中から、意外の人物が出たこともあるが、彼は泰平の世に、頭の働き一つで、國務大臣になり、彼なくんば、政界は自ら寂寥を感じる、といふ位の大人物になつたのは、恐入つたものである。著者は、此の一事に依つても、星の巨人たることを、斷言し得るのである。

而して、著者は、彼の巨人たる所以を語るに當つて、彼の母、松子の事を、世に紹介する必要がある。彼の母は、非常な賢母であつて、彼を、人と爲すに就いては、容易ならぬ苦辛を嘗めたのであつた。實は、松子あつて、始めて星が在るのである。松子は、極めて快活な氣風で、義侠心に富んだ、男優りの女であつた。松子が、彼を生んだ後に、父の徳兵衛は、幽冥の人となつた。到底女の手一つで、三人の子供を、育てることは出来ぬ。幸ひ、世話する者があつて、越後の國、中蒲原郡の人、星泰順といふ者を、入夫にすることになつた。此の人の本業は、醫者であるが、易者もするし、茶や俳諧もやり、亦活花のやうなことも、上手であつた。けれども、世渡りは下手な人で、入夫になつてから、手を出すことが、すべて失敗に了つて、終には佳馴れた家を立退く、といふ不幸に、陥つて仕舞つた。

彼の幼名は、濱吉と言つたが、泰順が、義父になつてから、星を名乗り、名も泰玄と改めた。松子が星を愛することとは、實に其の末子である、といふ許りではなかつた。子供の時分から、我慢の強い所持は、最も母の心を得たのであらう。されば、母は、女の子を、手放すやうな場合になつても、彼を、放し得なかつた。泰順に、氣兼ねをし乍ら、彼を、大事に育て上げた。濱濱へ來た時、星の一家には、天日の恵みもなく、極度の落魄であつた。泰順は、大道の賣卜者になり、松子は、彼を背負つて、榮螺の壺焼を、賣つて居た、といふほどに、憫れな境遇に陥つた場合にも、松子は、彼を手放す事は出来なかつた。

更に濱濱から、松子の郷里、相州浦賀へ行つて、暫く醫業を営んだが、これと思はしくなく、再び濱濱へ來ること